

# 西 和彦

## Special Interview

前号でお伝えした1チップMSX構想のその後を取材すべく、MSX MAGAZINE編集部が西氏にお話をうかがおうとしていたところ、情報筋から「かつてのMSX3プロジェクトの資料が見つかった」という重要な情報が飛び込んできた。さっそく取材班は「かつてのMSX3」について取材すべく、西氏の事務所を訪れた。

しかし、そこで我々取材班を愕然とさせたのは、悩める西の姿であった。もしかして次期MSXの開発に行き詰ったのだろうか？取材現場に一瞬、緊張の空気が流れた。

取材が進むにつれてわかったことは、次期MSXが大きく方向転換するという事。そして、わずか1年で、次期MSX構想がかなり具体性を帯びてきたことである。

次期MSXのキーワード「ユビキタスMSX」とは何か？ 真のMSX3とはどんなものなのか？ 最新テクノロジーで武装した次期MSXの全貌が今明らかにされる！



# 次期MSXの全貌 ユビキタスMSXが焦点

## MSX3の資料発見！

MSX3は情報家電のメディアセンターPC的なものを目指していたわけではないんですか。

西 そういうわけではないです。もう少し通信寄りでした。

具体的にはどういったものだったのでしょうか。

西 当時の資料がアーカイブのタイムカプセルの中にありますから、それを見てください。

20年以上前からの膨大なプロジェクトのアーカイブから発掘されたものは、なんと手書きサイン入りのシステム図や、マイクロソフトとの打ち合わせ用にトレースした概略図などだった。

次ページ資料は、MSX2が発売された1985年前後に作成されたと思われる。「CPU:Z280、VDP:V9948、SOUND:Y8950、SYSTEM:S1987」といった驚くべき内

容が書き記されている。また、テレビにカメラを接続してテレビ電話にしたり、スキャナとプリンタが装備されていたりと、すべてのインタフェースに入力と出力があるのが興味深い。MSX2の時点ですでに考えられていたとは到底思えないような要素が詰まっている。

Z280はZ80とオブジェクトコード互換の16bitCPUであるが、製造時期がずれ込んでしまったことも

あり採用されず、後にアスキーが独自開発したR800が用いられた。VDPはV9938からV9958に進化。SOUNDはY8950使用の拡張カートリッジ(MSX-AUDIO)が不振だったため、PCMを取り除いたYM2413(MSX-MUSIC)が標準となった。これらをハード的に統括するシステムチップは、MSX2で採用されたS1985からturboRで採用されたS1990へ発展している。